

2011年
5月24日
火曜日

「経済学」といえば、あらゆる事柄を数量化して、個人・集団の計算合理的な利益極大化の關係として社会を捉える学問だと思ってしまうのである。確かに経済学はそうした限定の中で精緻になったが、それに依存し過ぎると落とし穴に陥る可能性がある。人間の行動や社会の動きは非計算的・非合理的な動機によるものも多いからである。合理的な利益追求を非合理的な事柄を通じて実現する（賽銭による商売繁盛の祈願など）のみならず、利益計算では損をして「しつたいから」「すべきだから」することがある。損をしても名誉にかけて人や社会に奉仕するとか、信義や伝統的な価値基準によつて管理・販売するとか、である。その快感や満足を個人の効用充足として数量化できる部分もあるが、とりわけ行為の動機が個人の効用よりも社会

原田哲史 教授（文化と社会の経済学・経済哲学）

人間・社会の非合理的側面を重視する経済把握 ——ドイツ・ロマン主義の経済思想——

や集団・共同体の全体における意義を志向する場合、計算よりも言葉による意味關係の説明の方が説得的である。数量化できない文化的・慣習的・宗教的な事柄の説明を包摂する広義の経済学・経済思想が必要となる。

それを強く意識した経済学・経済思想は歴史的に存在した。ドイツ語圏では1920～30年代の晩期歴史学派や、そのまた100年ほど前のドイツ・ロマン主義の経済思想がそうである。ロマン主義「*Romantik*」（「ロマン派」）は18世紀末～19世紀前半のヨーロッパの文化運動であり、政治学・経済学にも及んだ。18世紀の啓蒙の合理主義と大衆化と、産業革命による機械的・計算的な利潤追求とに反発し、非合理的な側面を有する人格を重視して、それらが有機的に結合する場として人間世界

を捉えた。その代表的な経済思想家A・ミュラー（1779～1829年）が見たのは、貴族による土地管理や、ギルド（ツンフト）による手工業運営が残存するなかで、政府の「上から」の近代化によつてそれらが破壊され、殖産興業がなされていたドイツである。

ミュラーも時代の趨勢が産業化であることを否定しなかったし、昔に戻せるとも思わなかったが、共同的な關係をできるだけ残して（あるいは新たに形成して）非計算的で文化的な人間社会の利点を保持すべきだと論じた。彼によれば、スミスの称賛したマニユファクチュア的な生産様式では生産力が高まるが、数量的な利潤極大化のみを求める経営者が支配し、労働者はそのための手段として使われ、道徳的・芸術的必要素を備えた人格として陶冶されるこ

とはない。他方、ツンフトでは親方が職人を技能面のみならず、人格的にも立派な芸術家として育てた。近代的な生産様式が伸張してもそうした側面をいかに保持するのか、と彼は考えた。さらに彼が提起したのは、計算的理性が支配的になり同時代の様々な個人や集団（現在世代）の間で激しい利益競争が生じたとき、その利益追求は現存する競争者の「利他的」なものになるので諸世代（過去世代から未来世代）にわたる意志や希望の継承はなされない、という問題である。この発想は現代の文化継承や環境保護にも通ずる。

参考文献—原田「アダム・ミュラー研究」（ミネルヴァ書房、2002年）、伊坂 原田編『ドイツ・ロマン主義研究』（御茶の水書房、2007年）、田村・原田編『ドイツ経済思想史』（八千代出版、2009年）